

鳩摩羅什の足跡を訪ねて

― 長安からインド迄の9都市と、羅什の人生との連鎖の若干の考察 ―

山田 勝久

はじめに

私は、中国甘肅省の敦煌研究院で開催された敦煌学国際学術討論会では、「沙州敦煌二十詠の成立年代について」と題して、また、安徽省馬鞍山市の李白記念館での「李白詩詞国際討論会」では、「李白の晩年」と題して研究発表した。その他、新疆大学や北京第二外国語大学などで、唐代文学の研究成果を中心に発表してきた。

思い返せば、昭和54年（1979）より、李白の出生地と推断されているキルギスのトクマク（碎葉城）や、岑参の精神風土を探るため、亀茲国やジュンガル盆地の北庭故城を中心に、54回の西域調査を重ねてきた。唐朝辺塞詩の舞台となったオアシスを訪問するたびに、鳩摩羅什（以後、羅什と表記する）や法顕や玄奘ゆかりの遺跡に遭遇し、とくに、天山南路に羅什の伝説が多いことに気付いた。また、我が国の正倉院にも、羅什訳の漢訳仏典が、250巻以上あることが分かった。

ところで、平成23年（2011）2月3～5日、インドのニューデリーのインディラ・ガンジー国立芸術センターで、「鳩摩羅什―哲人そして予言者」と題して学術大会が開催されるので、出席して研究発表しないかとの連絡が、公益財団法人東洋哲学研究所からあった。私は羅什が歩いた疏勒、尉頭、亀茲、楼蘭、敦煌、涼州、蘭州、長安を現地調査した報告をした。

国際セミナーの会場には、イギリス、ドイツ、フランス、スイス、アメリカ、中国等から、約120名の研究者が集まり、多くの参加者が私の発表に関心を持ったのか、「鳩摩羅什の足跡図」のパネルの前は人だかりとなり、改めて、シルクロード研究者の中に羅什研究が高まりつつあることを感じた。

国際セミナーでは、28名の研究者から学術発表があった。内容は①伝記と伝説 ②漢訳文献 ③梵語原文 ④生涯と思想、の4分野であった。私は、「鳩摩羅什の生涯とゆかりの町の調査報告」(英文タイトル・A Report on the life Kumarajiva and the towns associated with him)と題して発表した。研究発表をしつつ悔やまれたことは、羅什の全行程をまだ踏査していなかったことである。未踏のコースを調査できたのは、平成24年(2012)8月である。カシュガル(疏勒国)で旅装を整え、ガンダーラ(罽賓国)への道を進んだ。まず、カラクリ湖畔を経てパミール高原(葱嶺)の4000メートル級の山河に入った。ところで、タシュカルガン(竭叉国)からガンダーラの途上にあるギルギットからは、サンスクリットで書かれた5―7世紀の律蔵「葉事」などの仏教經典が出現している。また、1935年にはギルギットの北約4・8キロにあるナウブル村の仏塔Cから、6―7世紀の写本「法華経」が発見された。ニューデリーの国立公文書館では、そのギルギット出土の「法華経」写本を直接参観することができた。白樺の樹皮に直立グプタ文字で美しく書写された經典からは、先人の労苦が滲み出てくるようで、館長の許可を得てその一部を写真撮影させて頂いた。本稿では、羅什の歩いた町や村の歴史や文化を、その人生と重ね併せて報告する。

第1節 鳩摩羅什の父、羅炎について

鳩摩羅炎は、天竺の人で代々宰相の地位を約束された名門貴族の出身である。具体的にいずれの地域かは不明であるが、鳩摩羅という姓は、西北インドに多く見られる。当時、部派仏教である説一切有部は、ガンダーラ地方とその周辺で全盛期

を迎え、西域に多くの僧が仏教流布のために旅立っている。なかでも鳩摩羅跋提なる人物は西暦382年、同じく西北インドからトルファンに行き、車師前部王弥寔の国師になっている。

鳩摩羅炎の父の鳩摩羅達多是、説一切有部の系統に属する仏法者で、その名が国中に広まっていたという。鳩摩羅炎もまた父に劣らず、志操が高く聡明にして節度ある人物で、40歳前後で出家し、遙か漢土への仏教流布を目指し、まず西域に旅立った。人生の総仕上げの貴重な時間を、俗世の栄華を求めるのではなく、残年を仏に供養しようと誓ったのであろう。

鳩摩羅炎はまず、インダス河をさかのぼりヒマラヤの西部とパミール高原の相迫るクンジエラブ峠を経て、南新疆の塔什庫爾干（タシユクルガン）に到着した。その後、北西に進んで疏勒国（カシユガル）に入国、しばしの間、疏勒の国王や民衆に仏教の深遠さを説いたのち、亀茲国を目指し天山南路を東方へと進んだ。当時、疏勒、亀茲、于闐、楼蘭はインド文化圏に属し、サンスクリット文が多数出土しており、言語は相通じるところが多くあった。

鳩摩羅炎が亀茲^{（ギルギス）}国に来るとの報に接した亀茲の人々は、その来訪を心待ちした。国王・白純もまた、西北インドの宰相の地位を捨ててわざわざやってきた羅炎を深く敬慕し、国境の西まで出向きその場で国師への就任を頼んでいる。

当時の亀茲国には、小乗仏教がすでに流布していた。その興隆している様子を『晋書』四夷伝は「仏塔廟は千所有り」と記している。さらに『高僧伝』にも、「聞くならく雀梨大寺に名徳既に多く、また道を得るの僧あり」云々とある。^{（註2）}鳩摩羅炎の信奉する仏教も亀茲の仏教も、説一切有部であったので、羅炎は亀茲の精神風土になじみやすかったことであろう。

この時期、故郷の罽賓を離れ、亀茲や高昌や于闐で仏教を流布した人物は多く、鳩摩羅跋提の他、僧伽跋澄や僧伽提婆や仏陀耶舎等10余人の名を史書に見ることができる。羅炎は白純王の期待どおり、優れた才覚と、豊かな人間性を兼ね備えて



釈迦が生まれたネパールのカピラエ城跡



釈迦が法華經を説いたインドの靈鷲山

おり、国師としての役目を十分に果たしている。

白純に、耆婆という妹がいて20歳になっていた。意志が強く美しい女性であったという。羅炎を見るや一目惚れし積極的に求愛、初めは受け付けなかった羅炎も、40歳を超えた我が身のゆく末を考え、これから遙か遠くの漢土まで旅する自信が無くなりつつあった。パミールの氷河や白雪の嶺々を越えた時の厳しい実体験を思うと、これからのタクラマカンやゴビの竜巻や砂嵐や流沙など、その何倍もの困難を伴う中国への旅路を乗りきる勇気がなくなつたとも考えられる。また、長安まで辿り着いたとしても、漢語のできない羅炎にとっては、訳経どころか布教することさえおぼつかない。毎日の生活にも不自由することは火を見るより明らかである。それゆえに、耆婆と結婚して、やがて生まれてくるであろう我が子に、漢土での弘教の使命を託そうと思つたようである。耆婆の愛を受け入れ、羅炎は還俗して結婚した。龜茲国の人々は、国師が僧侶をやめて在家になつた事実を受け、驚嘆し複雑な思いにとらわれたことであろう。

西暦350年、男子が誕生、幼い頃から優れ、「童寿」「神童」と呼ばれた。名前は父母にあやかり鳩摩耆婆と名付けられ、音写して拘摩羅耆婆、鳩摩羅什、究摩羅什、究摩羅什婆とも表記された。耆婆は夫の愛に包まれ、恵まれた家庭生活を過ごしていた。しかし、ある時、外出し墓所を遊観、人骨がいたところに飛散しているさまを見て無常を感じ、出家得道を誓つたと言われている。また、一説によれば、次男が早逝し死体を抱いて墓地へ行つたところ、出家の心が湧き上がってきたともいう。

出家したい思いを、兄の白純王や夫の羅炎に伝えたが強く反対された。そのため、耆婆は己れの意思を貫くために断食を実行、出家が認められなかった時は死をも覚悟した。その結果、6日後にやっと了解を得ることができ剃髪したという。出

家した羅什の母は、『高僧伝』によれば「専精にして懈らず、学して初果を得たり」とある如く、ひたすらに戒・定・慧の三学を修し、早くも自分の意志と努力で成仏できる境地に入っている。

第2節 鳩摩羅什、罽賓国（カシミール）へ

羅什は、母に続いて7歳にして出家、しかし、師僧も住んだ寺院の名前も分からない。ただ、その頃、亀茲国の仏教界の中心的存在として、仏図舌弥なる人物が活躍していたことが、『出三蔵記集』によつて分かる。おそらく王族である羅什は、仏図舌弥から直々に教えを受けたと思われる。

7歳から9歳までの2年間で、当時、亀茲国で流布していた説一切有部系の阿毘曇（アビダルマ）をすべて理解してしまった。さらに修行を深めるため、母に従つて当時の仏教の中心地であつた罽賓国への修行の旅に出たのは、西暦359年、9歳の時である。当時の仏教の中心地は、ガンダーラから罽賓の地に移つていた。『漢書』西域伝によれば、罽賓は現在のカシミールに相当、仏典の第4次結集が行なわれたところである。『大王統史』によれば、アシヨカ王（BC 273～BC 232）時代の仏教の伝播は、カシミール地方にまで及んでいた。

ところで、羅什が生きた4世紀頃の亀茲から罽賓までの主たる移動ルートは三本あつた。一つは亀茲から疏勒川の支流の達条川に沿つて西行し、ホータン川と合流する場所から南に向かい、河辺をたどつて于闐国へ出る行程である。于闐からは西方の皮山に出て細い山河の径を経て塔什庫爾干の石頭城に至り、その後、パミール



私は、カシュガルから西北インドに向う途中の、4000メートルを越えるパミール高原を進んだ

高原を越えてギルギットに出るコースである。

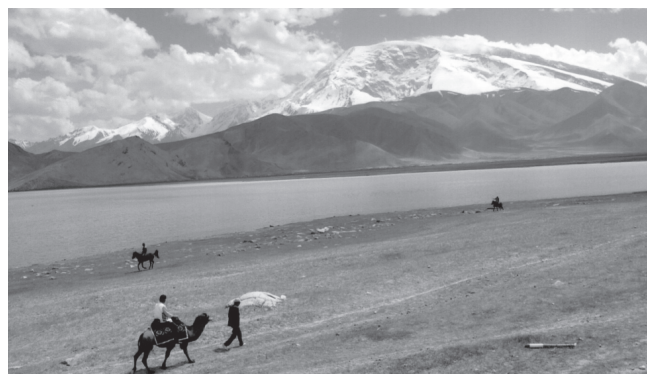
二つめは、亀茲から西へ向かい、その後、アクス附近から天山山脈を越えてキルギスの碎葉城に至り、ウズベキスタンのタシュケント（石国）からサマルカンド（康居国）に向かい、テルメズを経てクンドウズからバルク、バーミヤン、カービシー、ガンダーラ、スリナガルへと続く道である。

三つめは、羅什母子が歩いたコースである。母は羅什がまだ9歳であることを思い、遠回りであるが比較的安全な疏勒からタシュクルガン經由の道を選んだ。出発の日、文武百官が立ち並ぶ中、国王白純の見送りを受け、羅什母子は西門を出た。まず、亀茲から棋蘭（チラン）城を経て、尉頭国（トムシユク）のトクズサライ仏教寺院に入った。その後、疏勒に到着してからは東南に方向を変え、国境の町タシュクルガンでひとときの旅装を解いている。

第3節 竭叉国（タシュクルガン）の石頭城に到着

平成24年8月、私は南新疆の山河の道をひたすら車を東南に走らせた。カシュガル（古代・疏勒国）からタシュクルガンの石頭城までの350キロは、氷河あり湖水あり草原ありの美しいパノラマであった。とくに、標高3600メートルから眺めるカラクリ湖は、限りなく碧色で、パミール高原（葱嶺）の白雪とよく調和、湖畔をラクダや馬がゆつくりと歩いていた。

カラクリ湖畔を後にして、風光明媚な曲折した道を通り海拔4080メートルのパミール高原のスパシ峠に出た。羅什が



鳩摩羅什が通ったカラクリ湖畔からパミール高原の白雪を望む

母とともにガンダーラに向かう時に越えた峠で、近辺の山肌には一本の草も木も生えていない。私は天山山脈や崑崙山脈の高嶺に幾度となく登ったが、パミール高原の風光はいずれとも異なり興趣に満ちている。まわりを見渡せば、万年雪を輝かせた7500メートル級の山波が、牛の背のようにどこまでも続いていた。

羅什ゆかりの石頭城に到着した私は、大阪教育大学の犬童徹名誉教授らと共に、さっそく城内の調査に入った。石頭城は、「石で築かれた丸い城」の意で、高さ80メートル程の断崖の上に構築されていた。城の土台は大小の岩石で築かれ、城郭のみは堅い日干しレンガで建てられており、まるで天空の城のようである。標高は、3100メートル、城内は静寂に包まれ、今は住む人もなく荒涼としている。漢代の水瓶、壺、皿等の破片が散乱しており、葱嶺守掟城と呼ばれた唐代のものが一番多く見られた。しかし、あまりにも破壊されていて、官署跡や庶民街といった区別も分からない。ただ、仏塔のみがまだ朽ち果てず聳えていた。

タシククルガン（塔什庫爾干）は突厥語で、アルタイ語系のトルコ語派を母国語とするウイグル語であるが、住民のほとんどはタジク族であった。漢の時代には、蒲梨国や西夜国や依耐国の統治下にあり、インドとパキスタンとアフガニスタンとタジキスタンに抜ける要衝の地にあったことから、絶えず各国の争奪戦の舞台になってきた。たとえば、3世紀から4世紀にかけては疏勒国の支配を受け、北魏から唐にかけては喝盤陀国の領土に入れている。その後は、カシユガルのイスラム国家のカハラン王朝に、さらに元代には、チャガタイハン王朝に征服されるなど、数奇な運命にさらされ、今日は中華人民共和国の領土に組み込まれている。

羅什は石頭城をあとに、パミール高原とカラコルム山脈のほぼ中間にあるクンジェラプ峠を越えて、バス、グルミット、フンザに向かった。峠からフンザまで160キロ、ギルギットまでは110キロ、さらにインダス川沿いのチラスまで130キロ、タコットまでは245キロ、母子は、このコースを通って罽賓国（カシミール）に入った。『高僧伝』には「什は年九歳にして母に随い、辛頭河（インダス川）を渡りて罽賓に至る」とある。

羅什と同時代に生きた法顕も、東晋の隆安3年（399）60数歳の高齢でありながら、長安から渭水を渡り咸陽を経て鳳翔に入り、その後、平涼、会寧、靖遠、蘭州に至って炳靈寺を参観している。法顕は長安にいた時から羅什の名声を知っており、当時、羅什が涼州に滞在していることは分かっていたはずである。ところが、どうしたことが蘭州から涼州へかけての幹線ルートを通らず、蘭州を出るとすぐに、禿髮利鹿狐の領する西平（西寧）に行き、養楼山を越えて張掖（甘州）に入っている。妻帯し墮落したという噂のある羅什に、接したくない気持ち働いたのかも知れない。法顕は張掖、酒泉を経て敦煌に進み、玉門関を出てロプ・ノールの北岸より楼蘭（クロライナ）に入った。当時は鄯善と呼ばれ、国王は厚く仏教を信奉、国内には小乗仏教の僧が4千余人もいた。僧侶はみな、「天竺の書、天竺の語」（『法顕伝』）を学んでいたという。

法顕は楼蘭を出発すると孔雀川を上り、焉耆（カラシャール）に入った。そこで食糧を調達し、タリム川沿いに西行、ホータン川と合流する地点から南下してタクラマカン砂漠に入り、35日後に砂漠を脱出して于闐国（ホータン）に到っている。当時、于闐は大乗仏教が栄えた西域南道の最大のオアシスであった。その後、皮山から、葉城、すなわち子合国（カルガリク）に入り、葉爾羌河沿いの険難な山道をのぼり、竭叉国（タシユクルガン）に入っている。羅什がインドに向かう時に歩いた道と、法顕のコースが重なるのは今日の金湖楊である。以後、葱嶺を越えて罽賓国までの道のりは、羅什と全く同じである。すなわち、陀歴国を経てインダス川の支流を渡り烏菴国へ、さらに名竭国、宿呵多国、罽陀衛国に入り、竺殺尸羅国、弗楼沙国に到っている。弗楼沙国とは、今のペシャワールである。

玄奘三蔵の天竺までのルートは、時代が二百年以上も後になるので、その間に交通網が発達し、新しい道も拓けたので、単純に羅什や法顕と比較できない。また、天竺へ出発した年齢も異なり、羅什は9歳、法顕は60数歳、玄奘は29歳であった。羅什は若き母と一緒に旅ということもあり、安全を重視せざるを得ないから、疏勒から竭叉国のコースを選んだのである。法顕は、自らの高齢を考え、天竺への求法の旅は人生の残された時間との戦いでもあった。苦しくとも敢えて一番近い道、すなわちタクラマカン砂漠をホータン川に沿って北から南へと縦断したのである。

玄奘はできる限り各国の諸事情も見たいと思ったのであろうか、亀茲を過ぎると姑墨近辺から北西に向かい天山山脈を越えてキルギスの碎葉城に入った。その後、ウズベキスタン、キルギス、カザフスタン、アフガニスタン、パキスタンを経てインドに入国している。このように三人が異なるルートを選んだ最大の理由は、その年齢にあったと考えられる。

さて、罽賓国に着いた羅什は、「才明らかにして博識、當時に独歩す」（『高僧伝』）と評された、国王の従弟の槃頭達多に師事した。槃頭達多は、羅什の神俊なることを認め、罽賓国王も羅什に注目するようになり、ある時、王宮にてバラモンの論師と羅什との法論の場を設定した。バラモンは羅什が年少であるのを見て軽んじ、不遜な態度で接したという。『高僧伝』は、羅什に論破されたバラモンの様子を「愧惋して言無し」と記している。

罽賓国での仏教を3年余で修得した羅什は、12歳（361年）の時、母とともに故郷の亀茲国に帰ることになった。しかし帰途、さらに修行を深めるため1年間、文明の十字路といわれる疏勒に滞在することとした。カシュガル滞在中、西域諸国は競って羅什を招聘^{（注3）}している。

疏勒は、最果てのオアシスで、海拔1294メートル、町には葉爾羌河など三本の大河が流れ、『漢書』西域伝によれば、はやくも漢代から市場が開けていた。羅什が訪ねた頃の疏勒の人口は約2万人、『法顕伝』によれば、僧侶は千余、尽く小乗教であった。疏勒に仏教が伝わったのは、一世紀末であるので、短期間に流布したといえる。王城は、現在のカシュガル郊外のハノイ故城と推定される。2011年8月、私がハノイ故城を測量したところ、東西3・6キロ、南北1・5キロ、城壁も東側が約80メートル残存、疏勒国の9つの支城を守る中心的な都城であったことが判明した。この城より北へ約6キロ、モル仏塔は、往時の光輝を今に垣間見せてくれる。



羅什も訪れたカシュガル（疏勒国）に、今も残る3世紀ごろのモル仏塔

羅什にとって疏勒での最大の成果は、莎車国（ヤルカンド）出身の須利耶蘇摩という大乘論師に出会い師事できたことである。『広弘明集』巻二十三、僧肇撰『法華翻經後記』の「鳩摩羅什法師誄」によれば、羅什は師より「梵本を付嘱して言わく、仏日西に入り、遺耀まさに東北に及ぶ。この典は東北に於て有縁なり。汝慎んで伝弘せよ」との法華經流布の付嘱を受けている。この出典については、後世の仮託であるとの説があることは知悉している。羅什の没年が明記されているにもかかわらず、『高僧伝』にも『出三蔵記集』にも『晋書』にも出てこない。記述内容も仏教と道教を「二教または資なり」と記すなど、全体としての中唐の宗教観で叙述されている。唐の貞元15年（799）に撰述された『貞元録』巻6が初



トムシュク（尉頭国）のトクズサライ仏教寺院跡

見であり、僧肇の死後、385年も経過してから、潤色されて世に出てきた資料であるが、しかし常日頃、羅什に師事した人々の末流によってこのような口伝が長く語り伝えられていたことは事実と思われる。また、現実の証拠として、羅什一門が疏勒の東北の地、すなわち長安や洛陽において、法華經など大乘仏典を翻訳し流布しており、この記述の正しさを歴史的に証明しているといえる。すなわち後世の門下の挿入文であっても、記述されている内容は事実である。

第4節 尉頭国（トムシュク）のトクズサライ仏教寺院

尉頭国（トムシュク）は、西域36カ国の一つで、龜茲（クチャ）と疏勒（カシユガル）の間にあり、3世紀から8世紀にかけて栄えている。『魏略』西戎伝には、「尉頭国は龜茲国に併属」とある。朝貢諸国の官人の他、天竺から漢土に渡る行脚僧や、多くのソグド（粟特）商人が珍貨奇物を持って宿泊し賑わいを見せていた。出土する花紋の絹



鳩摩羅什が母と共に旅の疲れを休めた尉頭国の
チラン城の寺院跡

製品、彩絵陶器、五銖銭、ガラス玉、梵語仏典、漢文文書などの遺品は、異文化交流によって栄えた尉頭国の高い文化を今に伝えている。

尉頭国についての記述は、『漢書』西域伝や『資治通鑑』漢記にある。都城の北東には、後漢に造営されたトクズサライ仏教寺院がある。羅什が訪れた時期は、シルクロード交通の要衝の地に位置することから、天山南路の一大仏教拠点として隆盛を極めていた。王城の北の高台には仏塔が林立し、宿坊は参詣する人々であふれ、仏殿からは読経が止むことがなかった。

トクズサライ仏教寺院については、フランスのペリオが1906年に、ドイツのル・コックやイギリスのスタインが1913年に調査した。1923年と1959年には中国調査隊も入っている。私はNHKの関係者と共に、1986年3月に尉頭国に入り、トクズサライ寺院を本格的に調査した。まず、高さ30メートルの崖壁の中腹に、等身大の仏・菩薩が6体刻まれているのに気付いた。風雨にさらされ、今まさに朽ち果てようとしていた彫塑を写真に収めた。また境内から、多くの漢代の絹織物も発見した。

羅什は西暦364年、トクズサライ寺院の北東75キロ、棋蘭（チラン）城に立ち寄り、しばし旅の疲れを休めている。チラン城の規模は、東西約1.5キロ、南北約2キロ、北西の望楼の高さは、13メートルであった。残された住宅跡から推定すると、人口は1800人から2000人、城門は北と東と南にある。城内の西南に居住区が密集し、



トムシュクにある高さ18メートルのチラン烽火台

南北に幅約6メートルの大通りがあった。生活用水は、カシユガル川の支流の達条川から水路を引いて利用していたが、既に水枯れになって年久しく、岩塩が川床に積もっていた。

王城内の西側には、一辺が12メートル余の正方形の4世紀末頃の寺院があり、仏龕が8つ確認できた。内部を調査したところ、仏像も台座もすでに破壊されており、壁画の顔料がわずかに残っているだけであった。寺門も崩壊寸前で、インド風の高さ7メートル余の丸い寺塔が残存していたが、今にも崩れ落ちそうであった。

第5節 亀茲国（クチャ）への帰還

亀茲国は天山南麓にある人口約12万に及ぶ一大王国であり、タクラマカン砂漠の周辺では、最大の人口を誇っていた。「外城は長安城に等しく、室屋は壯麗なり」（『梁書』）・「王宮の壯麗さは、煥として神居の若し」（『晋書』）と記されている。当時、住民はアビダルマ仏教、いわゆる小乗仏教を信奉していた。そのため、罽賓国から帰国した羅什が、大乘仏教を説くのに反発し、怨嫉する者も相当いたと推察される。しかし、『高僧伝』に「四遠宗迎して之に能く抗するもの莫し」と、また「時に会聴する者、悲感追悼して悟りの晩きを恨まざるは莫し」とあるように、民衆は羅什の教説を聴聞しようと、説法の場合はいつも満席であった。

この時期、羅什の母の耆婆が、亀茲を離れ天竺へと旅立っている。兄の白純王との不仲、また、いつまでも我が子の側にいては修行のさまたげになると思ったのかも知れない。別れに際し母は羅什に、仏教を中国に流布することをすすめ、その成否は「方等の深き教え、まさに真丹に闡わすべし。之を東土に伝うるは、唯だ爾の力なり」（『高僧伝』）と述べて激励している。それに対し羅什は、「大士の道は、彼を利して軀を忘る」と応えたという。その力強い決意を聞いた母は、安心して旅立ち史書から姿を消している。おそらく耆婆は、罽賓の地で純真に仏道修行に励み、陰ながらわが子の大成を祈り、そ

の数奇な生涯を終えたと推察される。

亀茲に残った羅炎は、妻もいなくなり羅什も去ったあとは孤独であった。すでに還俗したこともあつて再び出家することは許されなく、サンスクリットやガンダーラ語以外は話すことができないので、漢土に行くこともできず亀茲国で生涯を終えるしかなかった。『高僧伝』等にも妻子なき後の羅炎の記述は全くない。羅炎が生きる道は、一人静かに余生を送るしかなく、空しく残年を悲愁と孤高のうちに閉じたいと思われる。羅炎にとつてのただ一つの喜びは、行き交う胡商や求法僧から、我が子が長安で訳経僧として大活躍している様子を伝え聞いた時であろう。

ところで、羅什は亀茲国に滞在中、罽賓出身の卑摩羅叉に従つて『十誦律』を学んだ。のち羅什が長安に行くと、卑摩羅叉も長安に赴き翻訳にたずさわっている。罽賓国で修行していた時の師匠であつた槃頭達多もやつてきた。羅什は師恩を報ずるがために、心を込めて大乘を説いた。師は弟子の成長した姿を喜ぶとともに、一カ月間に及ぶ激論の末、深くその教説を斟酌し、羅什の弟子となっている。

羅什が亀茲に住んだのは、14歳から35歳までの21年間である。ただし、『出三藏記集』では、罽賓から亀茲に帰還したのち、再び疏勒に行き、そこで仏陀耶舎の教えを受けて大乘仏教へと転じたと記している。それに対して『高僧伝』では、修行を終えて罽賓から亀茲に帰る途中、疏勒で滞在した時、須利耶蘇摩に出会つて大乘仏教を信ずるようになったという。この2説は全く相容れない記載である。私は、羅什の思想の深化の変遷を観た時、一度帰国して再び疏勒に行くというのは不自然であると思う。『高僧伝』の記述を支持したい。

西暦377年正月、前秦の太史が苻堅に奏上した一文に、「星あり、外国の分野に見ゆ。当に大徳の智人あり、入りて中国を輔くべし」とある。苻堅はそれに対して、「朕聞けり、西域に鳩摩羅什の有ることを」（『高僧伝』）と述べ、すぐに、羅什の入朝を請う使者を亀茲国に派遣している。しかし白純王は、親族でもあり国家の精神的指導者でもあつた羅什を手放さなかつた。

苻堅が、羅什一人を得るために長安から大軍を發したのは、建元18年（382）9月である。出発に際しての詔勅に、「賢哲は国の大宝なり。若し龜茲に克たば即ち駟を馳せて什を送れ」とあり、いかに羅什の来訪を心待ちしているかが理解できる。遠征軍は驍騎將軍呂光、陵江將軍姜飛以下7万余、途中で高昌や樓蘭の軍を先導させて西に向かった。

呂光軍が、龜茲城外に布陣したのは、翌年383年12月、平沙万里を西へ進むこと15カ月間の遠路であった。呂光は龜茲王へのねばり強い説得を試みた。羅什も王族の一人として、「宜しく之を恭承すべし。其の鉞に抗すること勿れ」と、呂光軍と対決することの愚かさを説いた。しかし、白純王は姑墨、疏勒、尉頭など西域諸国が救援の軍を派遣してくれるであろうことを期待、さらに、遠征軍は流沙を渡ってやって来たのだから、体力を消耗しているであろうと判断して総攻撃を加えた。しかし384年7月、龜茲軍は大敗北、白純王は殺され、弟の白震が傀儡の国王として即位することになる。

龜茲を攻略した呂光は、羅什の歳がまだ若く、平凡な人物とみて墮落させようとした。密室に閉じこめ飲酒させ、王女と淫を結ばせようとしたのである。しかし「什、常に忍辱を懷き、曾て異色なし」との姿に接し、呂光も慚愧の念をいだき、以後、羅什への威圧を止めたという。

思うに、羅什の出生年は西暦350年である。それに対して、この事件は西暦384年、羅什34歳の時の事である。それなのに「其の年、尚少きを見て、乃ち凡人となして之に戯れ、強いて妻わずに龜茲の王女を以つてせり」（『出三藏記集』）との記述の中、私は「尚」の文字に注目したい。「尚」は「その上に」の意で、以下に続く「少き」を強調する役目を果たしている。この点、34歳の壮年を「尚少き」と記述するのはおかしいと思う。

羅什を破戒僧として認識している初見は、504年成立の『出三藏記集』と、519年に書かれた『高僧伝』である。羅什の死んだのが409年（『高僧伝』）であるので、執筆したのは共に約100年後のことである。この4世紀から5世紀にかけての100年間で、中国仏教は大きく興隆し、羅什の評価もそれにつれて高まっていた。両書は、羅什に人間的な芳香を持たせるべく、破戒したけれども、偉大な業績を残し得たという潤色的要素を加えたものと思われる。歴史的事実と

は異なる脚色を、私はこの「尚」の一字の中に見るのである。中国人は論理道德に厳しく、ましてや仏教興隆時における過程において、破戒僧に対して国王が国師の礼をもって迎えるであろうか。三千人もの弟子が破戒僧のもとに集うであろうか。このことを思うにつけ、私は羅什の破戒はなかった感じている。

第6節 幻の王国、楼蘭（鄯善）にて

呂光軍の亀茲国駐留は一年余、建元21年（385）3月まで続いた。亀茲国の穏やかな人心や美しい風光に心惹かれ、亀茲に定住しようとした呂光に対して、羅什は長安への帰還を強く説得した。羅什自身の人生の最終的な目標は、長安に行つて訳経をすることだったので、いつまでも亀茲に駐留されてはたまらない。その結果、呂光軍は駱駝2万余頭、駿馬1万余匹、その他、珍宝千有余という戦利品とともにやつと亀茲国を出発した。羅什の去つた後の亀茲国は、急速にその国力を減退させ、仏教界も再び大乘から小乗へと転じている。

呂光軍は、『魏略』西戎伝にある焉耆から楼蘭を経て敦煌に至る道をとつて長安を目指し東に向かった。まず、長安への最短距離であるタリム川の下流の孔雀川に入り、小河墓地のすぐ北側を通つて楼蘭王国に入った。焉耆からトルファンに入り、そこから敦煌に入ったとの説、また、焉耆からトルファンへ、そして伊吾へ出て敦煌に通ずる道を通つたと考える人もいる。私は、この3つのコースを実際に移動してみたが、敦煌からロプ・ノールの北岸を通つて楼蘭へ、そして孔雀川ルートの方がはるかに安全な道程であることが分かった。『羅什』横超慧日・諏訪義純著、大蔵出版では、「呂



楼蘭の地下から発見された4世紀ごろの壁画

光は新道をとって高昌に至ったものとみられる」(170ページ)と書いているが、385年当時は、盛んに楼蘭道が利用されている時であるから、私はこの説をとらない。今日でも、ウルムチから楼蘭に調査に行く場合、多くの場合、コルラ市から孔雀川添いで入るコースをとっている。

楼蘭は、西域36カ国の一つで、『史記』巻123、大宛列伝に「邑に城郭有り、塩沢に臨む」とあり、農業も放牧も行なわれた^(注5)ロプ・ノールの西方28キロにあった国際都市である。『漢書』西域伝によれば、人口は1万4100人、兵士は2912人、「胡商販客は日々塞下にいたる」(楼蘭出土文書)とあるように、東西交通の要衝にあたり、経由する旅人は多い時では年間2000人にのぼっている。大砂漠の中のアシスであるので、人口の変動はさほどなく、羅什が楼蘭に入った当時は、『晋書』の記述によれば、約1万7000人ほどであった。

楼蘭の人々は厚く仏教を信奉し、城内には高さ10メートル余の9層の仏舍利塔が今でも聳えている。楼蘭王の王妃はしばしば、同じ仏教王国の西域南道の于闐国(ホータン)の王女であった。敦煌の莫高窟の壁画にも、于闐国の王妃の参詣があった記録が壁画として残っている。すなわち、楼蘭と于闐と敦煌は婚姻関係で連結しており、これらの人々は、みな楼蘭道を利用しての移動であった。

楼蘭から出土する漢文文書の多くは、書写した時の年号が記しており、晋王朝の司馬炎の時代のものが多い。また、城内から出土した珊瑚、毛織物、絹、玉などの調査により、楼蘭王国は、3世紀中頃から終わりにかけてが最も国力が増大した時で、疏勒、龟兹、于闐、莎車、焉耆と並ぶ強国であった。その支配地は、幅300キロ、長さ900キロにまで及び、一時期には、精絶国(ニヤ)をも支配し、その勢力は西域南道の于闐国の近くまで伸びていた。

出土文書によると、王国の滅亡は、丁零の攻撃を受け、住民がことごとく離散した西暦492年となっている。亡国の要因は、外敵ばかりではなく、楼蘭人の環境破壊によるところも大きかった。たとえば、棺桶を砂嵐から守るため、回りに150本もの胡楊の大本を円形に打ち込んだり、山羊や羊を必要以上に放牧し、草を根こそぎ食べさせてしまった。さらに、

二毛作を始め、土壌を傷め大地に塩害をおこさせた。また、冬はマイナス25度を超えるので、住民は暖をとるため胡楊や紅柳を伐り倒してしまったのである。剩え、僧侶が「4000余人」(『法顯伝』)と、人口2万人に満たないオアシスに於いて、何の生産もせず、ただ布施や供養を強要するだけの出家者が増大し、異常な人口比となってしまった。そのため経済は急速に崩壊し国力は衰退していったのである。さらに、出土文書には、出家者の妻帯や不祥事が多く記録されており、楼蘭の滅亡のもう一つの原因は、出家者の腐敗と墮落によると考えられる。

2003年3月2日、考古学上の「世紀の発見」と題するニュースが、新華社の報道として世界に発信された。これは、2月10日のウルムチの朝刊紙「晨报」の報道を受けてのものである。楼蘭の地下の墓室から、大量の極彩色に満ちた壁画^(注6)が、約1ヶ月前の2月3日にウルムチ市登山協会の趙子允会長によって発見されたという内容だった。流沙に眠る楼蘭王国がスウェーデンの探検家ヘーデンの案内人だった艾爾得克によって1900年3月28日に発見されてより100年余、楼蘭城からは古文書や文物は数多く出土していたが、壁画は全く発見されていなかった。

私は趙子允会長から届いた招待状を持ち、すぐに楼蘭に向かい、楼蘭故城から北北東に約25キロ、高さ15メートル、長さ約50メートルの半島状の台地にある地下墓の壁画^(注6)や彩棺を調査した。壁面には、イラン風に髯を生やし、グラスを持った6人のソグド商人の酒宴図や、放牧図が描いてあった。残念ながらホータンの2人のウイグル人が墓盗人として墓陵の上部を爆薬で吹き飛ばしたため、人物像の顔のほとんどは崩壊していた。もともとソグド商人の宗教はゾロアスター教(拜火教)であったが、楼蘭に住んでいるうちに仏教徒に改宗したのか、白壁や柱には、法輪と思われる絵が30近く描かれている。



鳩摩羅什が旅の疲れを癒した楼蘭城内の住居跡

駐留する呂光軍は、楼蘭で食糧や水を調達し、兵士は旅の疲れを癒した。羅什もまたロブ・ノールを眺め、まだ見ぬ長安の都に思いを馳せ、漢土での仏典翻訳に決意を固めたことと思われる。

第7節 敦煌（沙州）の白馬塔

敦煌は前漢の武帝（劉徹）が、前111〜前110年に敦煌郡を設置したことに始まる。初めは西域開拓のための軍事拠点であった。やがて西域が安定してくると次第に文化都市へと変貌、「華戎の交わる所の一都会」（「敦煌曲」）として、17の民族が雑居しつつも共存している。肌の色や言語を超えて、町には仏教を信ずる者どうしの連帯があり、外国からは、深目鉤鼻、緑眼深髯の胡人が数多く往来するようになった。

また、この地方には、莫高窟・西千仏洞・榆林窟など8カ所の仏教石窟があり、各地からの参詣者で賑わいを見せていた。その中でも、最も規模が大きく造営期間の長いのが、莫高窟千仏洞である。「莫」は「漠」のことで、砂漠の高いところに



敦煌莫高窟の大仏殿

ある洞窟の意である。「千余窟を計う」と唐の李氏碑文に刻まれているように、莫高窟には、多くの石室があった。開窟されて約20年後という創建間もない頃の莫高窟に羅什が行ったかどうかは、依るべき資料がないので不明であるが、仏教の根本精神を理解した羅什にとっては、草創の石窟などには関心がなかったであろうと思われる。

西暦385年3月、36歳の時に故郷の龜茲を出発した羅什は、楼蘭から東に約200キロメートルにわたって広がる風化土堆群（ヤルダン）を渡って、敦煌へは同年6、7月頃に玉門関から入城したと推定される。折しも、



鳩摩羅什ゆかりの敦煌白馬塔

經典を満載してきた最愛の白馬が死んでしまったので、その供養のために建立した敦煌白馬塔が今も残っている。今日のものは、清代に修復された塔であるが、代々この白馬の伝説は郷土の誇りとして語り伝えられてきたようである。私が40年前に訪ねた時は、トウモロコシ畑の中に孤影悄然と聳えているだけであつたが、今では、立派な門も造営され、入場料も徴収している。流沙を越えて敦煌までやってきた羅什と白馬の由来が、白馬塔の前に大きくパネルで描かれ、売店も多く並んでいた。

敦煌を出発した呂光軍は、長安を目指して進軍したが、すぐ東の酒泉で、彼の入城を阻む涼州刺史梁熙の子、梁胤の率いる5万の涼州軍と激突した。

しかし、龜茲から凱旋した気鋭の呂光軍7万人の前に、涼州軍はあつという間に壊滅、そのため河西地方の豪族はみな呂光に従うようになった。

酒泉で大勝利した呂光軍は、さらに河西回廊を東に進み、張掖（甘州）の黒水国で旅の疲れを癒している。私は幸いにも2011年3月、黒水城（カラホト）の調査の帰途、黒水国遺跡を訪ね、呂光軍の駐屯した軍営に立つことができた。

黒水国の王城は祁連山脈の北麓に位置し、豊かな黒河の流れのもと、古来、遊牧と農耕が行われていた。前4世紀には天山山脈の北東部のジムサ地方にいた烏孫人が東征して黒河一帯に住みつき、行国という王国を建てている。その後、羌族や月氏族が定住していたが、前176年には、モンゴル高原から南下した匈奴の支配するところとなった。匈奴はこの地で一大勢力を有していたが、前漢武帝の時、前111年から前110年にかけて、長安や蘭州方面から漢族25000余人が大量移住してきた。黒水国遺跡からは、今でも前漢の五銖銭や、後漢から魏晉時代の貨幣や陶器が多数出土している。さらに、漢字（小篆）で刻まれた石磚には、「大利」・「大吉」・「萬年」・「大富」・「宜銭」・「日利」・「金錢」と書かれ、朱雀や白虎や

玄武や青龍が描かれた画像磚も発見され、当時の庶民生活の一端が窺える。『甘鎮志』の駅伝「小沙河駅」にも、黒水国の支城の一つである南城の記録がある。それによると絶えず57頭の騎馬部隊が配置され、その軍兵は113名、牛車50輛とある。

羅什は、敦煌から東方に進むにつれ、次第に漢化していくこれらのオアシスを見て、「長安近し」、の感を深くし、異郷に足を踏み入れる我が身の深き使命を自覚し、来たるべき訳経の時を心待ちしていたことであろう。

西暦385年9月、呂光軍に従った羅什は涼州の姑藏城に入った。ところが、涼州に到って1年1ヵ月後、呂光は長安からの使者によって、主君の苻堅が淝水の戦いで敗北し、その後、死去したことを知った。帰るべき祖国を失った呂光は、やむを得ずこの地に拠って自立し、五胡十六国の一つである後涼王朝を建国した。従軍してきた7万余の兵士たちも、長安の父母や妻子の顔を見ることができず、異郷での生活を余儀なくされた。羅什は以後、36歳から52歳までの16年の長きにわたって、この辺境の町で生活することになる。

第8節 涼州（武威）にて16年間、学問研鑽に精励する

涼州は、「金の張液、銀の武威（涼州）」と言われるように、河西回廊の重要な食糧基地になっていた。西域仏教が中国に最初に到達した玄関口ということもあり、独自の仏教文化圏を構築していた。北魏の時代に造営された大同の雲崗石窟も、その多くは涼州の技術者集団がたずさわったので涼州様式といわれている。

近年、市内にある漢末期の將軍の墓から、高度な出土品が230点余りも見つかった。中でも、伝説上の動物である龍雀、又は飛燕を踏む青銅の奔馬は逸品である。その彫刻



鳩摩羅什も訪れたであろう涼州の大雲寺



羅什の舌が祀られている鳩摩羅什寺塔

技術の高さは、現在の彫塑のレベルから見ても遜色はない。『晋書』張軌伝に「中州より難をさける者、日月あい継ぐ」とあるように、涼州は辺境のオアシスであるが、豊かな中原文化が根付いていた地域であった。

羅什が住んだ16年間は、後涼王朝の呂光の在位期間とほぼ重なっている。戦乱の絶えない五胡十六国の世にあつて、この祁連北麓に住んでいた期間は、比較的平穏な時代であつた。そのため羅什は、呂光の相談役のような立場で、心おきなく仏典や漢籍の学習、それに漢語の修得に精励することができた。とくに、中国本土から僧肇をはじめ、若き俊英が続々と門下集つてきた。そのため、漢語だけでなく、漢族の民族性、生活習慣、年中行事なども学ぶことができた。さらに、漢民族が「詩」という短詩型を好むことを知ることができたことは大きな成果であり、後の仏典漢訳にあたり、大いに役立っている。もしもスムーズに長安に入城していたら、いまだ漢語も修得しておらず、仏典翻訳もままならなかつたと思われる。まさに長い目で見れば、涼州に長期間住むようになったことは、大いなる変毒為薬であつたといえよう。

涼州には、前涼第9代の王、張天錫（在位363～376）が建てた弘藏寺が今も残っていた。則天武后の時代に大雲寺と改められ、その時に設置された高さ8メートルの鐘楼も残存しており、それらの古色蒼然たる遺物を見て、私は羅什の涼州での生活を思いやつた。

後秦の姚興は401年5月、西域の交易ルートを手に入れるため、併せて、羅什を長安に招き入れるため、6万7千の兵を涼州に向けて出陣させた。すでに2年前に呂光は63歳で死去、その後は、国内に反乱が続き優れた人材がいなくなり、王朝は崩壊寸前の状態になっていた。

後秦軍の前にあつという間に敗れた後涼軍は、死者1万、離反者2万5千人を出し、その年の9月に国王の呂隆は降伏した。仏教を深く信ずる姚興は、当時の西域の政治状況を考えると、呂氏一族を撲滅することは、他のオアシスを敵に回すこととなると考えた。また、姚興は一人の仏教徒として、生命の尊厳と不殺生の考えが強く、結局、国王呂隆を許し涼州刺史・建康公に任命するという寛大な処置をとったのである。ただし、人質として、母・弟・子などをはじめ、文武の重臣50余家を長安に送るように命じ、その一行の中に羅什も含まれていた。

第9節 蘭州（金城）の炳靈寺にて

羅什をはじめとした人質一行は、涼州をあとにして南東に歩みを進め蘭州に向かった。蘭州は黄河上流に位置する歴史の町で、当時は金城と呼ばれていた。ここは、西の遊牧地帯と東の農業地帯の交わる接壤の地であり、チベット高原と西域との分岐点でもある。

蘭州から船で1時間余、黄河上流の積石山の峡谷を切り崩した岩陰に、4世紀末に造営された炳靈寺がある。炳靈とはチベット語で千仏、あるいは万仏の意である。旧称を龍興寺、別称を靈巖寺という。ここでは、乞伏氏が建てた西秦の建弘年間の窟龕も見ることができる。釈迦・多宝の二仏並座像もあれば、高さ27メートルの大摩崖仏もある。1998年夏、私はその大仏の頭上の左、地上からの高さは約35メートル、その岩肌に高さ約1メートルの泥塑の釈迦苦行像があるのを見つけた。断食の行によって骨と皮だけになっても、「苦もまた楽し」と思わせるような暖かさを感じさせる



蘭州の炳靈寺にある釈迦・多宝二仏並座像

像であつた。

釈迦苦行像はガンダーラ地方に多く見られるが、いずれも目を閉じたり眼光鋭かつたりして、崇高で近寄りがたい雰囲気のものばかりである。しかし、炳靈寺の苦行像は、口元や目にやさしい笑みを見せるなど写実的な表情をしており、私は思わずシャッターを切った。帰国後、何人かの研究者にその微笑する釈迦苦行像の写真を見せたところ、珍しいと言つて一様に驚いていた。

同じく大仏の頭上の第167窟の壁面には、法頭の直筆の墨書が残されている。羅什が法頭と同じように、草創まもない炳靈寺石窟を参観し、釈迦苦行像等を見たかどうかは分からない。

第10節 西安（長安）にて訳経へ

羅什が後秦の姚興より国師の礼を以つて迎えられ、長安に入つたのは、『高僧伝』によれば、弘始3年（401年）12月20日、52歳の冬である。姚興は29歳、賢人を多く登用し、その勢力は遠く甘肅省の敦煌にまで影響を及ぼしていた。そうした国家の興隆期に、羅什が国師として迎えられたということは、訳経という多額の資金を必要とする大事業にとっては、極めて幸運であつた。まさに、時が人を助けたとも考えられる。

ところで、羅什が仏典翻訳を志した最大の理由は、師匠の須利耶蘇摩との誓願、すなわち、漢土への法華経など大乘仏教の流布であつたと推察される。そのためには、まず釈迦の教説を正しく漢訳した經典が必要であつたが、残念ながらこれま



微笑する蘭州の炳靈寺の釈迦苦行像

での訳経は、安世高や竺法護など多くの先人によってなされてきたが、しかし、「文製古質にして、未だ善美を尽さざるを恨み、迺ち更に梵本を臨みて、重ねて宣訳を為す」（『高僧伝』）とあるごとく、きわめて不備なものであった。そこで、羅什は大いなる決意と勇気を燃えたぎらせ、新訳を試みたのである。經典だけでなく、『大智度論』や『中論』・『竜樹菩薩伝』・『堤婆菩薩伝』等も訳出し、その翻訳仏典は、後の中国仏教に大きな影響を与えている。

羅什訳のすばらしさの要因は、父の羅炎が天竺の人であったので、幼少から正統的な梵語を学んでいたことである。当時の亀茲国の言語はブラーフミー系統のトカラ語Bであったが、羅什は家庭にあつてサンスクリットも学習することができたのである。

もう一つは、翻訳する時に使用するサンスクリットのテキストが、書写に書写を重ねたものではなく、精度の高い梵本であったことである。亀茲国の王宮に保管されていた貴重な写本であったかもしれない。涼州滞在中に手に入れたことも考えられる。さらに、疏勒で師匠の須利耶蘇摩から譲り受けたことも想定される。私は羅什が使用したテキストは、諸資料の中に「梵文」と表記せず、「胡経」（法華宗要序）、「胡本」（出三藏記集・小品経序・成実論記後記）、「胡文」（維摩詰経序）、「亀茲文」（添品妙法蓮華経序）とあることから、須利耶蘇摩から拝受した梵文原典と、亀茲語に翻訳された胡経と両方を参照しながら漢訳したと考えている。

梵語から漢語への羅什の訳出の姿勢について、弟子の僧叡は「小品経序」で、「手に胡本を執り、口に秦言を宣べ、異音



長安の草堂寺の鳩摩羅什舍利塔

を両訳して、文旨を交弁せり」と記している。音律と格調にも意を注いで翻訳し、『高僧伝』は、「言葉がそのまま文章となり、削ったり改めたりすることもない。表現比喩は美しく簡約にして、玄妙深遠である」と記している。僧叡は、「今や羅什の新訳を得て、晴れわたった崑崙山上から、下界を俯瞰し得たようだ」（『法華経序』）と伝えている。

このように、羅什訳の經典は、格調高く簡潔流麗、詩を重んずる漢土の人々の渴仰に十分応え得るものだった。しかし、必ずしも漢土の僧たちが、羅什を尊崇していたわけではない。一時は門下に入ったものの、我見や怨嫉が生じ信心を狂わせ叛逆する者も出た。さらに、羅什が死去したのちさまざまな葛藤が生じ、師弟の誓いを破り、東晋の謝石が建立した道場寺の慧観のもとに集まり、反目する勢力の一員となった者もいた。仏駄跋陀羅・智嚴・宝雲・智猛・曇纂らのように、徒党を組んで長安の羅什一門に敵対、悪口する僧侶集団も出ている。

そうした中、道生は建業の竜光寺にあつて『五分律』の執筆参正をしていたが、讒言によつて国家権力により蘇山に流された。しかし、羅什門下の誇りに燃えて一步も退くことなく勇敢に信仰を貫き、最後は勝利を収めている。また、僧叡は師匠の偉大さを証明するため、漢土各地で布教の戦いを展開し、純真にして崇高な生涯を終えている。道融も彭城に移つて、弟子7千余人を指導し、74歳で死去するまで、羅什を深く敬慕し師弟不二の信仰を貫いている。

後秦の弘始11年（409）8月20日、羅什は長安の大寺にて死亡^{（注8）}、享年60歳、正確な訳経という使命を果たした偉大な生涯であつた。なお、死亡年については、前述のごとく後世の仮託であるが、僧肇撰『鳩摩羅什法師誄』^{（注9）}によれば、弘始十五年（義熙九年）癸丑の年（413）4月13日、長安大寺で薨じたとある。この卒年によつて出生年を算出すると、東晋の康帝の建元2年、西暦344年となる。唐の智昇『開元釈教録』巻4も同じ説を採用している。僧祐の『出三藏記集』は、東晋の義熙年間（405～418）とする。慧皎の『高僧伝』は、弘始7年（407）、又は弘始8年（408）、又は弘始11年（409）8月20日のいずれかとしている。その他、隋の吉藏は、弘始7年12月、又は弘始8年8月20日と記している。

死亡時の年令についても異説がある。費長房の『歷代三宝記』巻八では、「七十四」とあり、『貞元録』巻六では、「七十」

とある。『鳩摩羅什法師誄』も「七十」としている。しかし、私は、『高僧伝』の350年に出生し、409年8月20日に死亡したとの説を支持したい。『高僧伝』には、「薪が燃えつくし身体は焼けてしまったが、ただ舌だけは焼けても灰になっっていなかった」とあり、涼州には、羅什の舌を祀った8角12層、高さ32メートルの鳩摩羅什寺塔が建立されている。近年、その隣に客殿も建立され、地元住民はイスラム教徒が多いが、羅什に対しては敬慕の念が深く、郷土の偉人として高くその業績をたたえていた。

羅什の仏典翻訳の数量についても、種々の説がある。その主たるものを紹介すれば、①『菩薩波羅提木叉記』は50余部、②『出三藏記集』は35部297巻、③『僧祐録』は32部300余巻、④『高僧伝』は300余巻、⑤『開元釈教録』は74部384巻である。

仏教がシルクロードを経て、中国や日本に伝わることを仏教東漸といい、それに対して、仏教西還という考えがある。羅什の翻訳した「法華経」は、はやくも翌年には河西回廊に伝わって書写されている。また、新疆ウイグル自治区のトルファン（高昌国）のベゼクリク千仏洞に、ある日、大雨が降り洞の中まで水が入った。土砂が流され窟室の地に埋められていた瓶が発見され、その中に奉納されていたのが羅什訳の完成後、153年（559年）に書写された法華経普門品である。あまりにも貴重であるので、中国の一級文物に指定されている。

例えば、書写されている万（萬）、无（無）、尔（爾）、号（號）等は、当時の流行した俗字の書写体である。品末の偈頌もない。于闐国出土、旅順博物館所蔵梵文『法華経』のB写本と、このトルファン漢文写本の内容とが符号しているのも注目される。この事実、羅什によって長安で翻訳された『法華経』が、求法僧や官吏や商人たちによって、遠く河西回廊やトルファンへ西還していたことを物語っている。

以上、羅什ゆかりの町や村と、その偉業とを重ね併せて紹介してきた。今後、羅什の人生と思想と訳経は、1600年の時空を超えて、インドや中国のみならず世界の識者から注目され、評価されるものと確信している。

(注1) カシユガルからクチャまでは、尉頭、温宿、姑墨などの町を経て、徒歩では約1ヶ月かかる。このことを『遊方記抄』巻1では、「又從疎勒東行一月。至龜茲國。即是安西大都護府。漢國兵馬大都集處。此龜茲國、足寺足僧、小乘法」と記している。

(注2) 僧純、曇允等は、龜茲より長安に戻り、『比丘尼戒』を書き、その末序で龜茲仏教の様子を「拘夷国（龜茲）寺甚多、修飾至麗。王宮雕鏤、立寺形像、與寺無導。有寺名達慕藍、百七十僧、北山寺名至隸藍、六十僧、劍募王新藍五十僧、温宿王藍七僧、右四寺、仏図舌彌所統。寺僧皆三月一易屋床座、或易藍者。未滿五臘、一宿不得無依止。王新僧迦藍九十僧、有年少沙門、字鳩摩羅什、才大高明大乘学、與舌弥是師從、而舌彌阿含學者也。」と述べている。

(注3) 西域諸国が競って羅什の教説を求め、その来訪を切望している様子を『訳経図記』は、「西域諸王、請什進説。必長跪座側、命什踏而登焉。」と記している。

(注4) クチャの仏教については、羅什の努力により一時は大乘仏教を信奉する者も多くなった。しかし、羅什が呂光と共に長安に去ってからは、再び小乗仏教にもどっている。その様子を『大唐西域記』巻1、屈支国条には「伽藍百餘所、僧徒五千餘人。習學小乗教説一切有部。經教律儀、取則印度。其習讀者、即本文矣。尚拘漸教、食糲三淨、潔耽翫。人以功競。」と記している。

(注5) 『漢書』樓蘭伝に、樓蘭地域の環境や農業について「多葭葦木聖柳胡桐白草。民隨畜牧逐水草。有驢馬多橐他。」とある。

(注6) 樓蘭の地下墓の壁画については、北京で発行された『文物天地』、2003年4月号で紹介された。しかし、解説に誤りが多く、資料としての価値は写真のみである。

(注7) 羅什はインドの竜樹系の大乗哲学を中心にして、乱雑に翻訳された仏典を体系化し整理していった。こうした偉業を、『出三藏記集』は「逮于羅什法師、俊神金照。秦僧僧融、肇、慧機水鏡、胡能表發揮翰。克明經奥、大乘微言、于是炳煥。」と記している。

(注8) 羅什の死去した年については諸説がある。『高僧伝』には「以偽秦弘始十一年八月二十日、卒于長安。是歲晉義熙五年也。然什死年月、諸記不同。或云弘始七年、或云八年、或云十一年。尋七与十一、字或訛誤、而譯經錄傳猶有十一年者、恐雷同三家、無以正焉。」とある。『広弘明集』巻二十三には「癸丑の年、年七十、四月十三日」、すなわち413年に大寺で薨じたのである。

(注9) 1994年9月、新疆龜茲石窟研究所において、鳩摩羅什誕生1650周年国際學術討論会が開催された。私も出席したが、この時の「1650」の根拠は、僧肇撰『鳩摩羅什法師誄』や、唐の智昇の『開元釈教録』に基づいて、西暦344年出生説をとった開催であった。

(本文中の写真はすべて筆者撮影)

